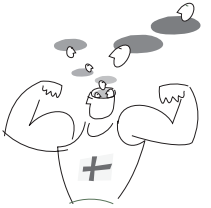
マイコミ新書

フィンランド教育成功のメソッド

日本人に足りない「実現力」の鍛え方



諸葛正弥

マイコミ新書

はじめに

「目標や夢を実現したい」

これは老若男女問わず、多くの方々が持つ共通の願望だと思います。そして、この願いを叶えるために、努力を積み、全員ではないにしても、きちんと目標や夢を実現する人々がいます。

私はこの目標や夢を実現する力を「実現力」と呼びます。

フィンランドメソッドには、この「実現力」を鍛える要素が一杯に詰まっています。

フィンランドメソッドはいろいろな定義がありますが、私はフィンランドの教育方法のことを総称して、フィンランドメソッドと本書では呼ぶようにします。

ただ、このフィンランドメソッドについてお話する前に、学校教師という肩書を持っていない私が、どうしてフィンランドメソッドの話をするのか、疑問を持たれることが多いので、私自身のことを少しお話しておこうと思います。

◆本文中には™、©、® などのマークは明記しておりません。
◆本書によって生じたいかなる損害についても、著者ならびに株式会社毎日コミュニケーションズは責任を負いかねますので、あらかじめご了承ください。

私は工学修士であり、建築設計を専門として学んでいました。そして、大学卒業後も建築設計を仕事としていました。教育と言えば、本業の傍ら、進学塾で指導していたことくらいでした。しかし、私はこの進学塾で数多くの生徒の目標や夢に向かい合いました。生徒たちの、夢を実現するために努力する姿に触れ、自分は何をしてあげられるのだろうと、真剣に考えるようになりました。

真剣に考えれば考えるほど悩みました。進学塾に通う生徒の一つの成果と言えば、受験で合格を勝ち取ることです。それはどれだけ塾講師が生徒に力を尽くしても、最後は生徒自身が努力しなければならないシビアな世界です。

結局、生徒の夢を叶えるには、本人の行動力が大切なのであって、他人が何をしてあげるかは一番大切なことではないのです。そのことに気づいたとき、塾講師も他人でしかなく、本人が夢を叶えるために無力な存在であると痛感しました。

しかし、教育という行為は人と人とが関わって知恵や文化を伝え、育んでいく行為です。それは進学塾であっても変わることはありません。だからこそ、自分が彼らに何を伝え、残してあげられるのかを追求すれば、結果として彼らの習慣や行動に影響

を与え、夢を叶えるための力になることができるはずだ、そう思うようになりました。

私は生徒とよく会話するようになりました。生徒と夢や目標を語り合って、それを叶えるために何をするべきか、自分で考えるきっかけを与えるためにどうすれば良いのか、それを考えました。

そして、授業でも頻繁に生徒の考え方を聞くように心掛けていきました。この行動は、コミュニケーションを通じて授業空間を知恵の共有ができる場にし、「なぜ？」「どうして？」を語り合うことで生徒自身が物事の本質にたどり着くきっかけを作るためでした。結果として生徒たちは明確な目標を持ち、それを叶えるために活発に授業に参加し、よく考え、学ぶ生徒になってくれたと思います。

そんな活動の最中、二〇〇三年のＰＩＳＡ調査（第一章で詳述）でフィンランドの学力世界一という結果に触れ、私はフィンランド教育の研究を始めました。

フィンランドの教育を調べてみると、実に興味深いものばかりでした。特に「なぜ？」「どうして？」を掘り下げていく習慣は、それまでの私も実施していましたし、フィンランドカルタ（第六章にて詳述）と言われる手法も別の経緯で取り入れて、す

でに生徒に実施していました。それまで私が実践してきた教育手法とフィンランド教育に多くの共通点を見出し、これは面白い、ここに自分が目指す指導のヒントがあるかもしれない、と思って、さらにフィンランド教育の研究を進めました。

その後、進学塾の同僚だった方が出版社へ転職し、二〇〇六年の年末に再会して二人で話をする機会がありました。

「教育分野で出版したい。何か注目される教育の手法はないか？」

その方の問いに対し、「フィンランドの教育が良いかもしれないよ」と答えたことによって誕生したのが、二〇〇八年一月に出版した『フィンランドメソッド実践ドリル』（毎日コミュニケーションズ）でした。

ドリルの反響は大きく、フィンランドの教育なんてあまり関心はないだろうと思っていた私の予想を裏切り、アマゾンの総合ランキングで一時は八位にもなりました。それも、担当の小山さんをはじめとする出版社の方々のおかげです。そして、その日以来、フィンランド教育をさらに詳しく研究することになり、講演の依頼や企業の研修も急増しました。そして、企業の人材開発担当者や学校の研修担当者の方々と話をすると、次のようなことを共通して言って頂けました。

《フィンランド教育の本をいくつも読んだけれど、結局、抽象論でどう活かして良いかがわからない。でも、あなたの本は具体的でわかりやすく、何をすれば良いのかが明確でした》

フィンランドの教育は確かに興味深いものです。しかし、それをどう日本人に活かすのかが本当は最も大切なのです。フィンランドの教育をそのまま日本にトレースしても上手くいくとは思えません。フィンランドメソッドの本質はマニュアル的なパターン学習ではなく、行動し、表現することで本質に近づくものであり、それを支えるのは教師をはじめとする大人の力だからです。

マニュアル化した教育はマニュアルの範囲から出る才能を伸ばすことはできません。目標や夢を実現させるためには、「できない理由を探す」のではなく可能性を切り拓く実現力が必要で、それはフィンランド教育で行われている表現や行動の習慣によって大きく鍛えられるのです。

本書では、日本人が日本の性質や文化に合わせてフィンランド教育の何をどう活用していくのかという視点でフィンランドメソッドを分析し、実践方法とともにみなさんに紹介します。

第一章では、フィンランドメソッドの概要と分析を紹介
第二章では、土台になる「聴く力」を解説
第三章では、実現力という言葉の概要を解説
第四章では、フィンランドメソッドと実現力の関係性を解説
第五章では、実現力をつけるための思考や習慣について紹介
第六章では、ワークによる実現力養成のトレーニングを紹介
第七章では、企業でもフィンランドメソッドが注目される背景について紹介

という全部で七章の構成になっています。第一章から読んで頂けると嬉しいですが、興味のあるところからお読み頂いて、徐々に理解を深めていって頂いても構いません。本書を通じて、みなさんの実現力養成に一役でも買うことができましたら幸いです。

諸葛正弥